

哲学するからだ

- 一人称の身体の現象学試論サブタイトル -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
橋本 光代

ある夏の昼下がりに。なんのへんてつもない日常が、「バーン」という爆音に似た音とともに粉々に散らばっていった。

私の第二の人生が幕を開けた。

私は交通事故にあい、右ひざの機能を失った。闘病生活の末、「中途障害者」という制限付のからだを手に入れた。

本論文では、モーリス・メルロ＝ポンティとともに、私のからだを見ていきたい。そしてからだへの理解を深めるために「現象学的記述」を用いる。現象学的記述は、主観と客観が分かれる以前の意識レベルに光を当て、意識の流れをありのままに記述していくというものである。具体的には「自分のからだを感じていること」、「いまからだに起こっていること」を言葉にしていく。

第1章では、交通事故にあった瞬間からレスキュー隊に引き出されるまでの時間のなかで経験したことについて書く。車体に挟まれ閉じ込められたさい、車のなかで私がどのような態度をとり、何を感じていたのか、私と他者の視点をぶつけ合いながら描いていく。

次に第2章では、レスキュー隊によって車から引き出されたあとのことにふれる。少女時代に出会った「自由自在なからだ」と、事故直後に出会った「けがを負ったからだ」、入院しベッドのうえにくくりつけられ「自由を奪われてしまったからだ」について記述する。さらに、「患者になったからだ」として存在していた私の感情にも分け入る。

続く第3章では、病院から退院したあとのことについて述べる。身体障害者という新しい世界の入口に立ち、初めて見たあらたな地平とはどのようなものだったのか、不都合な脚が感じる時間性・空間性について記述する。

最終章では、私がどのように生きている実感を伴って、からだを取り戻しつつあるのかということに触れる。体験を通して「いまからだに起こっていること」をていねいにみていく。現象学的記述に紡がれたものから何が見えるのか？

現象学に出会わなければ、私は事故の体験を内側から見ることも、自分のからだを探ることもなかったであろう。「事故にあった私」と「それ以前の私」、「からだを取り戻したいと願う私」の絡まりをほどく現象学は、今あるからだを「愛しきからだ」へと変容させるものとなる。